

猫かわら版



「間男、見つけた、動くな」とらは、そばにあったミカン籠でハッシと受けて、おこまは落ちた子猫をくわえて逃げようとする。くまは尻尾を踏んで「アマから先へ」と斬りかかる。そこへ、縁の下から駆け出て来たのは、米屋の優男の猫ゆき。引っ掻く爪を持ちながら「出刃包丁とは野暮な男だ。こりゃあ、俺に預けねえ」と、止めに入る。とらを間男というのは間違い。順番からいえばこの家の猫の旦那はとく。こまの亭主はとくさんだろう。ゆきの説得は、さらに続く。しかも、とらさんは、おまえさんの命の親。去年の春に米屋の子供が飼っていた雀をくまが食べて、とらに嫌疑がかかって丁稚の三太が、とらが食べたと言いふらした。捕まったとらさんが「猫ちがい

でござります」と鳴いても、わかってももらえない。結局とらさんは濡れ衣を着せられて、殺されかけた。米屋の旦那の妙庵様が、彼岸の内だから殺生はいけなないと、その場はおさめ、命こそ助かったものの、ぶたれて大けが。身代りになったとらさんは、恨み言一つ言わなかった。その心意気と、とらさんを間男呼ばわりして出刃包丁を振り回すお前さんを比べたら、とらさんとおこまさんが舐めあったことに、腹を立てられないうらやま。ゆきの話を聞いたくまは、納得して「これ、とら公、出刃包丁は俺が誤り、堪忍さつせえ」【解説】猫は日照時間が長くなる春先から夏にかけて発情する「長日繁殖動物」とされています。物語で



は、おこま子猫を産んだばかりなので、季節は初夏だと想像できます。子猫をくわえてとか、引っ掻く爪とか江戸時代の人の猫観察力には脱帽です。

